
預言者

織田慶次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

預言者

【Nコード】

N9735K

【作者名】

織田慶次

【あらすじ】

彼女は超能力者だ。その力を使い占いをしていたある日、事件が起きた

プロローグ（前書き）

皆さん始めまして織田慶次です。初めて小説を書くので駄目な部分が多いと思うけど読んでもらえると嬉しいです。

プロローグ

皆さんは予知能力があったらどうするかそして今から読む小説はそんな能力を持つてしまったとある女性の話である。

彼女は小学生１年生くらいになったとき初めて自分の能力に気づいた寝ているときに自分の今日起きることが分かってしまったのだ。しかし超能力はそのときの彼女を苦しめた未来のことを誰かに話すと気持ち悪がられてしまう。

このことで友達ができなかった。

中学では遠くの学校に行ったから、自分の能力を知っている人はいなかったが彼女はすっかり暗い性格になってしまっていた。

超能力はどんどん発達していった。最初は思い出に残るようなことしか夢で見られなかったけど大人になったら好きなときに好きな時間のことを見ることができるようになった。他の人の未来も見れるようになった。彼女はその力を使い占い師になった。彼女の占いはよく当たると言われ、テレビとかにもよく出るようになった。彼女の占いはいつも混んでいる。

そしてある日、突然事件が起きた。

第1話 さらわれる

いきなり真つ黒な服を着た男が3人現れた、しかし彼女は驚いていなかった。彼女はやっと来たかというような顔をしていた。それは当たり前でもあった。

「おいその女、名前を言え！」

いきなり男が大きな声で彼女に話しかけた。しかし彼女は落ち着いて静かに

わたなべしゅんこ

「渡辺順子」

と、それだけを言った。

「こつちに来い」

強引に渡辺の腕を強く掴み連れ去っていった。

渡辺は目隠しされ車に乗せられた。そこが近いのか遠いのかさえわからなかった。渡辺は暴れることもなく冷静に車に乗らされた。

どれくらい経ったのかは分からないけど車が止まったのは分かった、渡辺は車から降ろされて、ある建物の中に入りらされた。椅子に座らされてやっと目隠しを取ってくれた。しかしそこは暗闇で何も見えなかった。暗闇の中、男が

「俺達は何故お前をさらった理由を教えてやる、それはお前が本当の超能力者だからだ。テレビなどに出る超能力者はほとんどが嘘だ、しかしお前は違う、本物なんだ。本当は超能力者は今の世に居てはいけないのだ」

渡辺は超脳力で前から知っていたが寒気を感じてしまった。渡辺はなにも言えなかった。

第2話 死まで後、1週間

「だから俺達はおまえを殺すのだ。おまえの死刑は一週間後だ」
一週間後に死ぬ、間違えではない、自分の予言はその日が最後で死んでしまつてゐる。

後は死を待つだけ、逃げたいしかし逃げることのできない、部屋に居る。

男はいつのまにかいなくなつていた。・・・考えていても死ぬだけだ、おとなしくその日は寝た。

渡辺 死まで後六日

時間は分らない、だけど渡辺は起きていた。

「さつさと歩け」

また新たな犠牲者が来たらしい。

ここからでもこんなに聞こえるから他にも聞こえているはずだ。そのほかには何も聞こえはしなかった。

渡辺 死まで後五日

バーン

大きな銃声がしたその後すぐに叫び声がした。五日後、自分もあんならと思つと怖くなる。

渡辺 死まで後四日

もう何もない。その時

パリーン

遠くのガラスが割れた音がした。

「だれた、おまえは」

悪者達がそう叫んでいる。

よく分からないことが起こっている。

扉が開いた。

「大丈夫か？」

よく分からない人がそう言った、瞬間気絶してしまった。

「うーん。ここは」

周りを見回す自分の部屋だ、ん？知らない人がいる。

「あなたは誰ですか？」

「お前の命の恩人」

「・・・まあ、興味はないけど。そういえば私あの一週間後あそこ
で死ぬはずだったはずなんですけど」

「ふーん。知らん」

私の予言ははずれたことがない謎が一つ出てしまった。
生きてるからまあいいか。

第3話 超能力大会（前書き）

新しい章に行きます。

ここからがんばりたいです。

第3話 超能力大会

私が連れ去られてから一年を過ぎた。何も変わらずやっている。いやっ今日から変わるだろう。なぜって私は予知能力を持つてるから。ガタツと玄関が開いた。

「よっ元気か？」

いきなり変な奴が入ってきた。

「・・・・・・」

私はそいつの顔を見ようとしなかった。

「おい、無視か？俺がいなきゃおまえは死んでいたんだぞ」

そうこいつは連れ去られて死にそうになったところを助けてもらったんだ。だから命の恩人みたいなものだ。

「でっ今日は何しにきたんですか」

「まあおまえならもう知ってると思うが超能力大会が始まったらしいんだ」

「知っています」

「まあそなたとは思っていたけどな。一応、聞くけど変わったことはないか？」「うゝん、あっそういえば最近、予知が外れることがあるんですよ」

「ふーんまあ分からないけど大会は自由参加だからな」
やはりそう言っと、出て行った。

超能力大会は明後日、来るのが遅すぎる。

第4話 さあ出発だ

明後日になった、準備は完璧だ。持ち物はあまりないけど。後はあいつを待つだけだ。

集合場所は私の家の前、これで間違えはないと思う。

しかし遅いさつきからただ立ってるだけなのは辛い、さつきから15分は待っている。

あつ遠くにあいつが見えた、無駄に多くの荷物を持っている。気楽に手を振りながら走ってくる。

「よっ待ったか」

「そりや待ちましたよ。それになんて大荷物なんてすか？」

「えっこの荷物か。これはいろいろ入ってるからな」

なんかどうてもよくなってきたしまった。

「それでどうなって行くんでしたっけ？」

「超能力者の大会だから普通のいきかたではないと思って、遠くからまた新たな男が現れた。」

「お待たせしました。さあ大会に行きましょう」

そう言つて私たちに近づき

「準備はいいですか？では行きますよ」

光に包まれた私たちは気づいた時は違う場所だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9735k/>

預言者

2010年10月10日02時30分発行